

ホームレス支援ニュースNo.8

2008年8月31日

広島県社会福祉士会ホームレス支援委員会(編集:岡崎仁史)

この事業は、県民の皆様の寄付金である広島県共同募金事業の配分金等を受けて事業を展開しています。ありがとうございました。

今回は、(特集)「路上は変わったか? ホームレス自立支援新基本指針(2003年)から4年」を考えてみます。

◆広島市においては、1987年にボランティア団体「広島夜回りの会」が路上生活者支援活動を始めて既に21年経ち、広島県社会福祉士会等の専門職団体も夜回りへの参加、くつろぎ入浴サービスを始めて4年を経過しているが、やはり依然として脱路上になっていません。

◆ホームレス支援委員会は、約10名のメンバーで、2002年以来、広島、呉、福山の地域で、夜回り、くつろぎ・入浴サービス、就労・生保申請等の支援を通して、ホームレス者の脱路上支援を行っています。皆さんの参加をお待ちしています。

◆福山、呉のホームレス支援活動も報告のとおり、進んでいます。

「路上は変わったか?」～2007年度の広島の夜回り活動をふりかえって～

鈴木千賀子

私は八丁堀界隈を夜回りで担当しています。人生と活動の先輩である「夜回りの会」の方たちに学びながら、また、くつろぎ入浴に参加して、2007年度は18人の方たちの路上脱却にかかわりました。

その多くは、生活保護申請を勧め、相談に同行した方、アパート探しなどを支援した方たちです。他には、稼働能力があると思われがちな40～50代の方で、長年の厳しい路上生活により体を壊し、自ら保護申請に赴いた方たちもありました。身分を証明するものを一切なくした人の年金再開までの手続き支援、親族との連絡、認知症のある方は「かけはし」へつなぎ、知的障害の青年には家族ぐるみでのアウトリーチ相談対応をケースワーカーにお願いしました。生活保護を希望されない青年には、自立支援基金(広島県社会福祉士会)を活用して就職が決まるまでの家賃・生活費をお貸しました。

女性の路上生活者は、詳しい事情を話されることが少ないためとりあえずの身の安全を確保する支援を行なおうとしますが、居場所がみつかって家族の元へ返られた方、どこかへ行かれた方、1年ぶりに再会した方、とさまざまです。

2007年度、夜回りでは20名近い方と出会っていましたが、2008年度に入ると10名前後とぐっと少なくなりました。おかげで一人ひとりの方と話をする時間が持てるようになり、4月からの4ヶ月間で生活保護につないだ方(高齢者)が3人、仕事・住居に結びつけた方(女性)が1人、帰郷を促し出身地の社協に受け入れネットワークを作ってもらった方(知的障害者)が1人です。

しかし未だに路上脱却の明確な意思を示さない方の中には、精神疾患をお持ちだと思われる方もあり、この分野を得意とする方たちが夜回りに参加してくださることを切望しています。

この夏を乗り切れずに衰弱して緊急入院された方、他の路上生活者にも支援者にも存在を知られることなく、ひっそり公園で亡くなっていた方もいました。

路上は変わったか? 人数は確かに減りましたが、新たな路上生活者はさらに生み出され続けています。不安定雇用問題を改善しない限り、支援しても支援してもきりがなく、というのが実感です。さらに、政府の基本方針は依然として就労確保が先行しており、まずは住居確保、並行し

て就労確保、という現場からの要望・提案がどうしても理解してもらえません。

しかし、まずは出会った方の希望に沿って、その方の人生にかかわっていくことをこつこつと続けていくしかないと考えています。住居に入られた方への連絡や訪問も必要です。会では、第4土曜日のくつろぎ入浴サービスの日に、路上脱却した方たちのサロンをするようになりました。

誰かから「地を這うソーシャルワーカー」という表現をお聞きしたことがあります。そのようになりたいものですね。一緒に活動してください。スタッフが足りません！！

夜回りは4月から11月は第2・4水曜日、12月から3月は毎週水曜日の夜8時30分から10時30分くらいの間です。

■2007年度くつろぎ・入浴サービスの特徴 米澤恭子

2007年度で目立ったことは、路上脱却者が増えたことです。一年で少なくとも10名が路上を出てアパート入居をきめられました。そのほとんどが生活保護受給者で、仕事に就かれた方は2名を確認しています。

生活保護受給者の年齢は、50～60歳代で、全員が医療を必要とされる方です。中には、認知症の方もいらっしゃいます。広島市は、行政が支援団体と協力して路上生活者の街頭相談に当たっていることから、必要であれば保護する方針が行き渡っているため、それが、路上脱却につながっていると考えられます。

仕事に就かれた方の中、一人は入浴サービスの場所になっているアパートの管理人として住み込んでいただいています(家賃一部負担。)誠実な人柄に加えて、路上から脱出したいという強い意思と、働きたいという意欲が決め手となって委託しました。管理人を置いたことで、緊急一時宿泊等、機能が広がり、室内が常に整頓されて、快適になりました。

もう一つの特徴は、女性の利用者が2名来られたことです。いずれも50～60歳代の方です。そのうちの一人は、管理人を委託する前でしたので、入浴の場所を一時宿泊にと提供を申し出ましたが、友人のところへ行くと言って、そのまま姿を消されました。このことでは、何かフォロー出来なかったか、悔いが残りました。もう一人は、家族とのトラブルで家を出て路上生活を始め、11月に入浴に来られました。その方も、2回利用しただけで姿を見せなくなりました。しかし、最近になって夜回りのスタッフが発見し、半年ぶりに入浴にこられました。そのスタッフの尽力で就職が決まったとの朗報を得ました。女性の場合は、家族から身を隠したい事情もあり、慎重な配慮の必要を感じています。

くつろぎ・入浴サービスへのボランティア参加は

2003年のホームレス実態調査から就職、入浴・清潔、食事などのニーズが分かり、入浴サービスを開発し、2004年2月20日から始め、2008年3月末現在で170回を越えました。

社会福祉士会が責任団体となり、看護協会、介護福祉士会、社会福祉協議会、ボランティアとの協働です。

現在の活動の場所は西区のアパート。活動は第1・第2金曜日、第3・第4土曜日の月4回で、いずれも12時30分～18時です。利用者は予約制で、一人90分利用で、1日3、4名ですが、時には5名になることもあり、普通の会話の流れから脱路上に向けての相談支援を行っています。

この事業は、広島県共同募金会助成金、広島市補助金、地域住民の寄付(お金、物品)で運営しています。広島県社会福祉士会事務局まで(082-254-3019)。

1 活動実績

広島市内のアパートにて、健康チェック、入浴、休憩、簡単な食事、靴・衣類等必要物品の提供、生活相談、就労支援、生活保護受給支援などを年間 42 週提供しました。第 1・2 金曜日、第 3・4 土曜日 13:30-18:00。4 月末に場所の移転をしたので、準備のため回数は減少しました。

(支援実績)

年度	回数	実利用者	延利用者	路上脱却	死亡	路上
2006	46	48	138	16	1	31
2007	42	34	105	16	1	18

(路上脱却の内訳)

	就職	就職+貯金	年金	就労+生保	生保	帰郷	小計(率)
2006	2	1	3	1	10	0	17(35%)
2007	7	0	0	0	8	1	16(47%)

(特徴)

- 1) 脱路上生活者は 16 名、47%でした。入浴サービスを重ねて信頼関係を作り、相談支援し、各種社会資源に結び付けました。
- 2) 就職 7 人は土木作業の仕事などであり、また生活保護自立は多く、4 年前の本事業開始当時は健康であった人も数年に及ぶ路上生活で病気になり生活保護活用となっています。
- 3) 路上生活者は、住居付き土木作業に就き一度脱路上しても、土木作業をやめると、再び路上に舞い戻り、不安定な路上生活を続けています。
- 4) (特筆)ホームレス・ウーマンが 3 名。DV で家出してきたので、シェルター、生活保護を助言するが、2 回目以降行方不明になり心配しています。一人は帰郷しました。

(人的資源)

スタッフは、脱路上者をアルバイト雇用し(1 人分、自主財源)、専門職団体およびボランティアの社会貢献活動(8人)で、約 5 人で運営している。路上経験者もボランティアとして参加して支援活動を担ってくれています。

(物的資源) 中区のビルが取り壊しになり、西区に引っ越しました。

(財政資源) 広島市補助金、県共同募金助成金、本会自主財源、市民の寄付。

(情報資源)

予約制。利用者の次月の予約、夜回り時の予約、福祉事務所およびハローワーク経由の就職面接前の利用依頼(3 件)。金曜日実施は、結核等の感染症の場合、区保健センターの健康診査につなぐことを考えているが、一度もありません。マニュアル作成。

(相談援助)

脱路上の鍵は、入浴回数よりも、本人の意思・ニーズと生活を作る社会資源に繋ぐことであり、継続的な相談援助を重視しています。そのための、ボランティアの方の普通の会話はとても利用者の心を和ませ、人間関係をつくり、それは本人の所属する社会関係を作っており、一度家族・地域の間人間関係から切れた人を社会に再統合しているのでしょう。見えにくい人間関係・社会関係は個人を支えるコミュニティ、福祉コミュニティを作っているのだと思われます。

2 就労自立支援事業

利用回数を重ねて人間関係ができて、相談支援、就労相談を行い、就労に繋がった人は 7 名

で、また福祉施設への仕事紹介を1名行っています。

3 生活支援事業(行き場づくり)

路上を脱却した人が、再び路上に舞い戻らないために、自らボランティアとして入浴等の支援活動に従事し、週1回の行き場となっています。2008年度は、第4週はコーヒー、お菓子、おしゃべりのサロンを始めています。

路上生活経験者のボランティア活動は、とても親身な対応で、頭が下がります。

『人は必要とされることを必要とする。』を実感しています。

4 市民への広報啓発事業等

自立生活支援センター、刑務所建設排除事件に見られるように、住民の福祉体験による福祉理解を図るために、ボランティア研修(2007年12月2日実施。広島市社協からの委託)、実習生の受入(広島国際大学大学院生等)、ホームレス支援協議会の開催(2008年2月23日、県、県警、広島、呉、福山市行政、ボランティア団体、専門職団体約30名の参加)、広報誌(ホームレス支援通信、年4回)・hp(社会福祉士会)・メール通信の発行などを行いました。

5 事業実績(再掲)

①実績は、実人員34人、延べ105人の利用があり、利用者個人は月入浴サービス1回、公衆浴場による月1回(券を提供)で、月2回は清潔を保持できました。利用者の回数の幅は最少1回、最多12回でした。徐々に人間関係が作られ、本人の意思・ニーズと社会資源に結びつけ、上記のように16人が路上生活を脱却しました(47%の脱路上率)。勿論、路上生活しながらも18人が清潔を確保し、市民生活に参加しています。

②市民社会への参加：清潔になり、臭いもとれて、着替えてこざっぱりとして、また新たな人間関係を作り、人間の尊厳と自信を取り戻して、職安やデパートなどの市民社会に行くことができる。

③2006年度の事例で、低家賃住宅に居て貯金して、一般賃貸住宅にステップアップした事例を参考にして、借上げた2DKのアパートの一部屋を脱路上の意思の固い人を居住させて、低家賃、アルバイトの斡旋により(低収入の確保)、ステップアップさせる道筋を見つけました。つまり、低家賃住宅の確保ができれば、もっと多くの人が低収入で働きながらも脱路上ができるということです。つまり、一般化すると、基本指針のように就労自立・支援が先ではなくハウジング・ファースト(先に低家賃住宅の確保)、同時に就労です。そうなると、低い収入でも脱路上できます。誤解を恐れずに言えば、路上生活者にとっては、生保等によるマンション居住という大きな変化で誰も心配してくれる人がいないよりも、みんなの支えと自分の決定で一つひとつの生活の改善の積み重ねがあると、脱路上に意欲的に進むということです。

自宅のできる寄付ボランティア

こんなものがあると助かります。眠っている品がありましたらぜひ寄付をお願いします。

■タオル、夏、秋物の衣類(厚手のシャツ、洗濯済みのズボン、ジャンパー)、ベルト、新品下着(トラックス型)、靴下、運動靴、スポーツバッグ、帽子(野球帽)、自転車(防犯登録つきの中古)

●食料：お米、缶詰、即席カップ麺、レトルト食品、カレールー、日持ちする野菜(かぼちゃ、ジャガイモ、たまねぎ、だいこん、にんじん)など。

(寄付感謝) ①お米10kg*3人、②介護福祉士会会員からの物品寄付(掃除機、ちゃぶ台、衣類、お米など)③東広島市有志の方(日持ちする野菜)

※この他の物品の寄付については、事務局にご相談いただくと幸いです。